

ICT地域コミュニティ創造部会

地域ICTクラブの目指すもの ～広島県三原市での取組み～

平成31年1月18日

MIHARAプログラミング教育推進協議会

会長 岡田 吉弘

広島県三原市って？

450年前



智将 小早川隆景

- ・「浮城」の異名を持つ三原城の城下町
- ・瀬戸内海を掌握
- ・軍事的・経済的中心地

高度経済成長期



- ・広島県の交通の要衝（陸・海・空）
- ・重厚長大産業
- ・企業城下町として備後圏の中心地

現在



(2018~)

広島県三原市って？



20年前の駅前風景



現在の駅前風景



私たちの掲げるビジョン

IT・スタートアップ 集積地域

本年度は、
最初の一歩目
という位置づけ

継続・浸透・発展

商店街×プログラミング教育
三原モデル完成（2019年）

**MIHARAプログラミング
教育推進協議会発足（2018年）**



サービス、流通、小売り、製造、建設等あらゆる事業領域で、IoTやICT等の新規事業が次々と生まれるアジアのシリコンバレーMIHARA

IT起業都市をなぞらえて、
“〇〇のシリコンバレー” と称される地域



私たちの描く未来の絵姿

ICTやIoTで垣根をこえた、あたたかみのある地域コミュニティ



すべての人が住みやすく、すべての人が精神的に豊かに暮らす街

次第

- 0 地域ICTクラブの目的・役割
- 1 地域ICTクラブの立上げ
- 2 メンターの確保・育成
- 3 講座の設計～運営
- 4 地域ICTクラブの継続可能な運営に向けて

0 地域ICTクラブの目的・役割

ロボットを活用して、商店街のにぎわい創出とICT人材の育成を両立させた、
仕組みをつくることで、三原発のプログラミング教育モデルを確立する

地域ICTクラブの講座の集大成として、三原市内の商店街7か所に、
児童生徒のプログラムしたロボットを設置

コミュニケーションロボットが課題解決の要望に、
「とても応えた (43%)」「応えた (57%)」
(※店舗等アンケート結果)

ロボット設置という目標設定で、児童生徒や
メンターの学びの意欲向上が狙い



業務改善・課題解決

ロボットを用いる
プログラミング教育



飲食店やホテル等

プログラミング教育の
理解推進

ロボット探検ラリー



地域住民や親子等

体験講座2回、シリーズ講座3回
その他発達障害児向け3回 (※昨年実績)

児童生徒のプログラムしたロボットをめぐ
るスタンプラリー。参加者200名以上
が商店街を周遊。

0 地域ICTクラブの目的・役割

地域ICTクラブの三本の矢



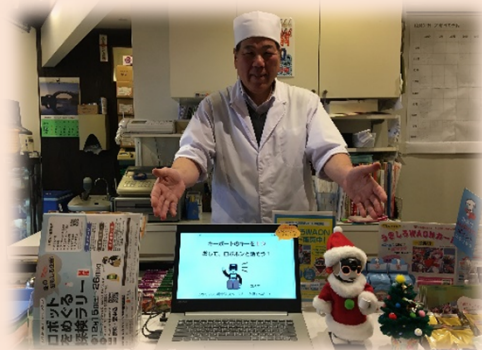
メンター育成の研修会と勉強会の開催。研修後に、講座でプログラミングの指導・補佐（OJT）。

研修期間：8月～11月 研修会：4回 勉強会：6回



児童生徒対象のロボットプログラミング講座を開催。三原市内に設置するロボホンのプログラム作成。

体験講座：2回 シリーズ講座：3回 発達障害児向け講座：3回



三原市内の飲食店やホテル受付に、コミュニケーションロボットを設置。児童生徒が現場ニーズの調査する等の商店街巻き込みの講座カリキュラム作成。

設置時期：2018年12月15日～26日

1 地域ICTクラブの立上げ

立上げに必要な要素

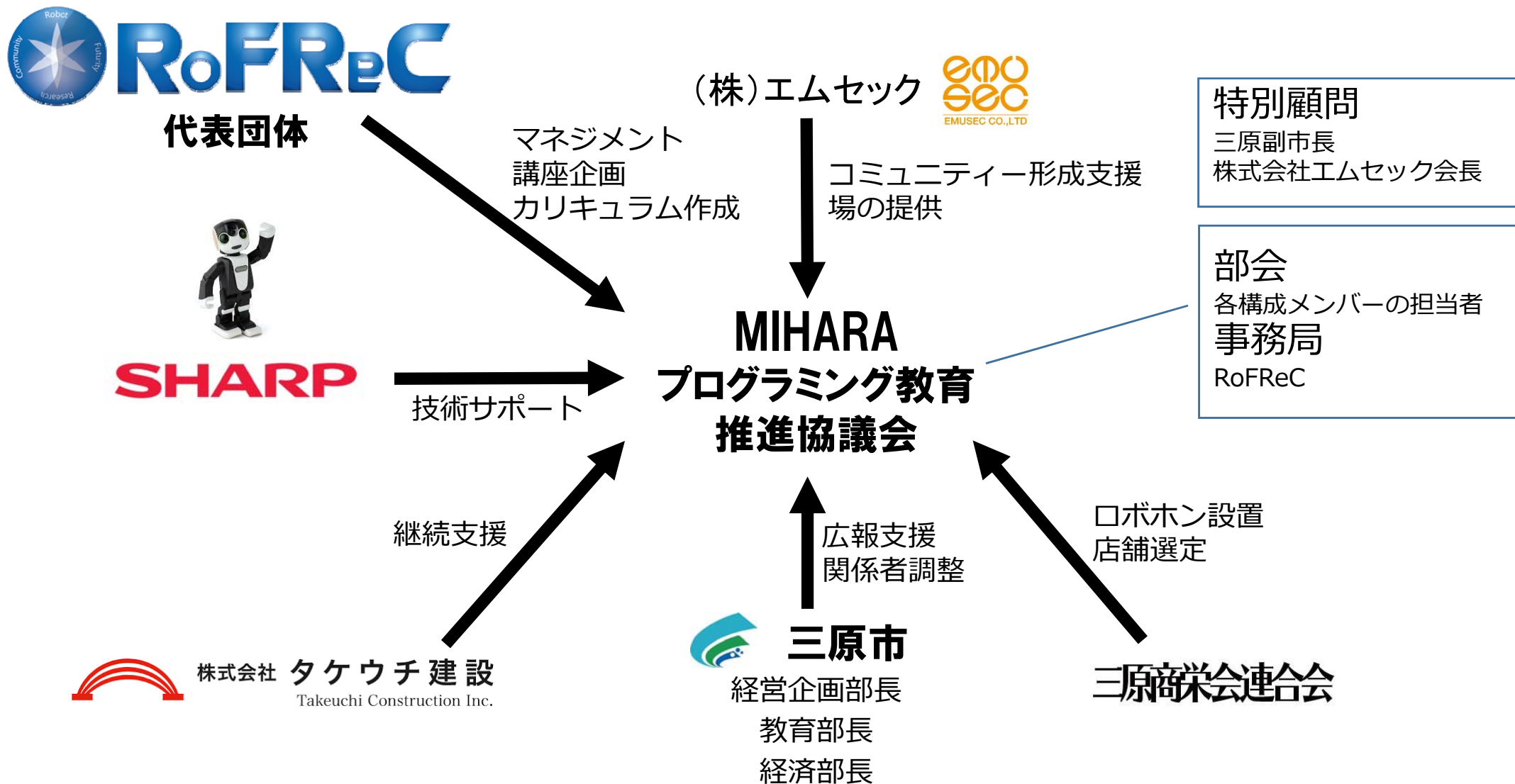
- ①行動力と決断力のある代表団体の存在
- ②代表団体と三原市との連携、首長レベルの前向きな関与
- ③代表団体と教材提供者(ロボットの開発者)との連携
- ④“であう”をコンセプトにしたアクションセンター三原の場所(代表団体の共同設立者が運営)
- ⑤意思決定プロセスの明確化(最後は、代表団体が決められる体制)
- ⑥ノートパソコン、ロボット等の確保のハード面整備



MIHARAプログラミング教育推進協議会の各々の構成メンバーが、役割を果たせる駆動力ある体制(立ち上げ期は、協議会の駆動力が肝要)

1 地域ICTクラブの立上げ

MIHARAプログラミング教育推進協議会の体制



1 地域ICTクラブの立上げ

円滑な立上げのポイント

- ①立上げ約半年前に、フォーラムを開催。主要メンバーは、フォーラムでビジョンを共有
- ②“おもしろがる”雰囲気(広報宣伝としてのロボット)
- ③総務省のお墨付き(民間発意であること、中国地方で唯一というプレミアム感)



松下政経塾主催の教育フォーラムを、
広島県三原市で開催



子供も大人も楽しめるロボットは、
いつのまにか地域に人気者に

2 メンターの確保・育成



31名のメンター

商店街チームは24名

発達障児チームは7名

※広島県外から4名の参加

(愛媛、徳島、兵庫)

※三原市、市議会議員の参加

MIHARAプログラミング教育推進協議会のメンターに求める素質・経験等

- ①何よりも“学びたいという意欲”
- ②面白がって取り組める“好奇心”
- ③プログラミングスキルは高いほうがいい(経験はあったほうがいい)
- ④子どもとのコミュニケーション能力(教育に対する思い)

※研修会・講座は、原則全回数参加必須、説明会で事業スケジュールの共有

2 メンターの確保・育成

ポイント

- ・メンター向け説明会の開催
- ・地元の大学の巻き込み(大学でのプレゼン、県立広島大学三原キャンパス)
- ・メンター募集の広報は、市の広報誌と、HP、SNS広告(Facebook)
- ・「小中学生とプログラミングを学ぶ大人を募集します」という広報
→「プログラミング指導してください」というと、多くの方が経験がないので、「指導はできない」と感じる。
- ・地域外への呼びかけ(横展開を意識)
→徳島・兵庫・愛媛からの参加者は一本釣り
- ・チーム制にすること。①お互いの得意不得意を補う関係づくり。②チーム間での切磋琢磨



メンターのお困りごとを共有し、意見交換

3 講座の設計～運営

学びの効果を高める講座設計や教材開発・確保のポイント

- ・明確な目標設定“商店街の店舗や施設に、コミュニケーションロボットを設置する”
- ・目的は、“商店街のにぎわいを創出して、地域の人々の笑顔に貢献する”
- ・「何のためにプログラミングを学ぶのか」ということについて、方向性を明確に示す
- ・商店街や地域からの期待によって、学びのモチベーションUPと責任感の醸成
- ・現場への聞き取り調査、ロボットの仕様の考案、プログラム作成の担当の一連を経験
- ・バリュープロポジションキャンバスの利用(ビジネスモデル作成を意識、起業家育成)



課題調査

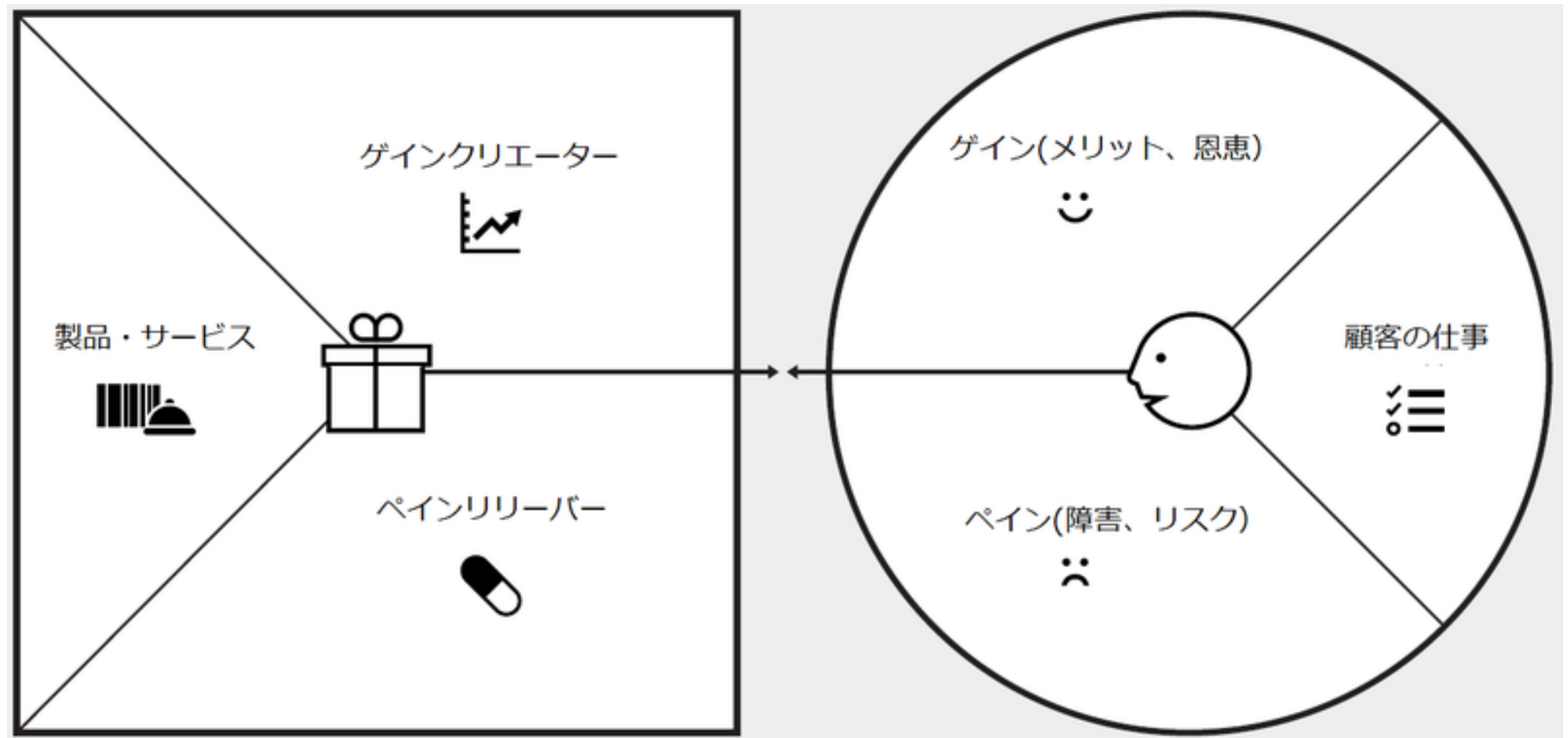


プログラミング学習



ロボットの店舗設置

3 講座の設計～運営



ロボットの仕様を考えるフレームワークとして、バリュープロポジション・キャンバスを活用。ビジネスモデルの作成の入り口を体験させることで、将来の起業家の育成につなげる。

3 講座の設計～運営

学びの効果を高める講座運営のポイント

- ・ロボットプログラミング体験講座(延べ80名の参加)、商店街シリーズ講座(28名の参加)、発達障がい児向け講座(10名の参加)
- ・体験講座の募集は、三原市内の小中学校全校へ、チラシを配布
- ・発達障がい児向けは、三原市教育委員会を通して、校長会でプレゼン。校長より、児童生徒へ直接お声がけ
- ・メンターは、メンター研修会に加えて自主参加の勉強会の実施。児童生徒は、通常講座に加えて、自主参加の勉強会の実施
- ・ロボット設置期間中に、地域住民を巻き込むロボット探検ラリーの実施
- ・ロボット設置直前には三原市長を訪問して、児童生徒よりプログラムの発表説明
- ・事業終了時に店舗アンケートを実施。それを踏まえ、三原市長プログラミング賞の授与。



三原市長を訪問



産経新聞掲載

4 地域ICTクラブの継続可能な運営に向けて

自立的な継続活動を実現する運営体制等

- ・次なるプロジェクトのビジョンを共有する場としての特別講演会の開催(12月下旬)
- ・継続的な、市(行政)と関係づくり
(来年度に実施する他のプロジェクトを始動している、例:三原だるま×プログラミング)
- ・メンターのコミュニティが維持されること
- ・商店街の協力意欲の維持
- ・参加費徴収による運営



元Google米国本社副社長・日本法人社長の村上憲郎先生による特別講演会 (参加者は70名以上)
次なるプロジェクトに向けて、準備を進めている

さいごに

- ①MIHARAプログラミング教育推進協議会の紹介VTR（1分30秒）
<https://youtu.be/FYJCMjeLMw8>



- ②三原発のITの学びの紹介VTR（2分）
https://youtu.be/_gv1f8FuyZ8



- ③ICT地域活性化大賞2019に、申請済

プレゼンの機会をいただき、ありがとうございました。
引き続きよろしく願いいたします。